

## 現代社会における工芸の実作と教育の現場

研究年度・期間：平成 12 年度～平成 14 年度

### 平成 12 年度

研究代表者：西脇 友一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：柳原 睦夫

(工芸学科 教授)

共同研究者：平金 有一

(工芸学科 教授)

人見 政次

(工芸学科 教授)

藪 亨

(教養課程 教授)

田中 敏雄

(教養課程 教授)

伊藤 隆

(工芸学科 教授)

福本 繁樹

(工芸学科 教授)

梅田 幸男

(工芸学科 助教授)

佐々田美雪

(工芸学科 助教授)

小野山和代

(工芸学科 助教授)

南 和伸

(工芸学科 助教授)

奥田 右一

(工芸学科 講師)

田嶋 悦子

(工芸学科 講師)

研究助言者：中川 幸夫

(現代華道家)

山口 道夫

(工芸学科 教授)

熊井 恭子

(長岡造形大学 教授)

深見 陶冶

(陶 芸 家)

橋本 真之

(金属工芸作家)

研究補助者：東野 眞紀

(芸術文化研究科 助手)

### 平成 13 年度

研究ディレクター：柳原 睦夫

(工芸学科 教授)

共同研究者：平金 有一

(工芸学科 教授)

山口 道夫

(工芸学科 教授)

西脇 友一

(デザイン学科 教授)

田中 敏雄

(教養課程 教授)

藪 亨

(教養課程 教授)

伊藤 隆

(工芸学科 教授)

人見 政次

(工芸学科 教授)

福本 繁樹

(工芸学科 教授)

梅田 幸男

(工芸学科 助教授)

佐々田美雪

(工芸学科 助教授)

小野山和代

(工芸学科 助教授)

南 和伸

(工芸学科 助教授)

奥田 右一

(工芸学科 講師)

田嶋 悦子

(工芸学科 講師)

研究助言者：佐藤 道信

(東京芸術大学 助教授)

中井 康之

(国立国際美術館 主任研究官)

建畠 哲

(多摩美術大学 教授)

研究補助者：東野 眞紀

(工芸学科 非常勤講師)

加賀城 健

(芸術文化研究科 助手)

南野 馨

(工芸学科 非常勤講師)

### 平成 14 年度

研究ディレクター：柳原 睦夫

(工芸学科 教授)

共同研究者：平金 有一

(工芸学科 教授)

山口 道夫

(工芸学科 教授)

佐野 敬彦

(芸術計画学科 教授)

田中 敏雄

(教養課程 教授)

藪 亨

(教養課程 教授)

伊藤 隆

(工芸学科 教授)

人見 政次

(工芸学科 教授)

福本 繁樹

(工芸学科 教授)

梅田 幸男

(工芸学科 助教授)

佐々田美雪

(工芸学科 助教授)

小野山和代

(工芸学科 助教授)

南 和伸

(工芸学科 助教授)

奥田 右一

(工芸学科 講師)

田嶋 悦子

(工芸学科 講師)

研究助言者：今井 陽子

(東京国立近代美術館 研究員)

北澤 憲昭

(跡見学園女子大学 教授)

松原 龍一

(京都国立近代美術館 研究員)

藤森 照信

(東京大学 教授)

研究補助者：南野 馨

(工芸学科 非常勤講師)

東野 眞紀

(工芸学科 非常勤講師)

加賀城 健

(芸術文化研究科 助手)

当研究計画は、21世紀における「工芸」と「工芸教育」の実体についての調査研究とともに、21世紀の工芸理念の研究をすすめる活動の一環である。その具体的な方法としてセッションの企画開催を中心に活動をすすめた。「セッション」(session=会期、集まり、集団活動の意)企画の状況設定には、一定のこだわりをもって、十分に趣向をこらすことを心掛けた。それにはまず、各研究目的とともに開催地を特定して、その地に全員で足を運ぶということである。実物(作品)に直接触れたい、生きている文化に触れたい、臨場感とともに考えたいと「現地」にこだわった。このことによって現地の空気とともに、最新情報、専門家や当事者の説明や声に触れることができる。また、参加者全員が一定期間、同一環境に拘束されることによって、共通の問題意識をもって意見交換に集中できるという利点も得た。そして、セッションのパネリストを複数設定して、できるだけ簡潔に研究発表や意見交換をおこなってもらうように依頼した。研究会を、パネリストから既発表の知識を一方向的に供与していただくの場に終わらせることなく、つねにあらたな問題を掘り起こし、それについて共同で考えていただくということを企図したからである。その結果、あらかじめ提示した議題と、意外な顔合わせ、異なった専門分野からの意見、開催地で見聞する文化によって惹起する問題意識などがあいまって、効果的に議論を深めることができた。

平成12~14年度の研究計画では、各年度に視点や論点を変え、3年間の活動を、より多角的、総合的なものとするようにつとめた。初年度は、創作活動の第一線で活動する実作者を中心に現代に目を向け、次年度は、理論の研究者を中心に、古代を視野に入れるべく「縄文時代」に焦点をあて、最終年度は、地域性をとりあげた。3年間にわたる研究計画の議題は、時間軸において「現代」「縄文時代」「モダニズム」に、空間軸において「日本と西洋」「土着性」に収斂した。とくに「現代」と「縄文時代」をとりあげる過程で「モダニズム」が大きな関心事になった。それは、明治時代以降の西洋文化の流入や近代主義によって、日本の伝統的な芸術構造が大きく変容したが、それが今日の状況を決定する大きな要因になっているので、その部分を改めて再検証してみるべきだとの考えが示されたからである。また、現代に先鋭化する国際化、情報化の動きをとらえるには、地域性、土着性といった空間軸をとりあげるべきだとの考えもでてきた。それは、3年間のあいだに信楽、長浜、京都、青森、三方五湖、天竜、那覇と、全国を精力的に移動した研究活動に、土着性を感覚的にとらえる機会がメンバーに与えられたことも原因しているかも知れない。しかしセッションでは、設定したテーマに従って、単純な議論が展開されるわけではない。縄文文化をテーマとするセッションでは佐藤道信氏の発言によってモダニズムへの関心に導かれたし、モダニズムをテーマとするセッションでは藤森照信氏によって示された国籍不明の建築によって土着性について考えさせられた、といった具合で、各セッションで多様な問題が錯綜して展開した。

実績の活動概要としては、1)講演会・研究会・セッション企画開催。2)懇談会、記録、投稿など。3)美術館や研究機関の取材・訪問、研究者との交流。4)その他、研究課題に関連する資料収集、文献研究、国際交流などがあげられるが、紙幅が限られているので、ここでは実績報告を公開した報告書出版とインターネットのホームページを紹介し、また成果の一端

をまとめた出版についても報告する。詳しくは、それを参考いただきたい。

平成 14 年度末に、3 年間の活動成果の報告書『21 世紀の工芸を考える - 大阪芸術大学藝術研究所研究計画の成果から』を刊行 (A4、総 56 頁、平成 15 年 3 月 13 日、求龍堂刊) 活動の一端を公開するためインターネットのホームページ「大学における『工芸』の教育・研究はどうあるべきか」開設、逐次更改。(http://www6.ocn.ne.jp/~kogeiken/)

今回の 3 年間の研究活動に先立つ平成 9~11 年度研究計画「高等研究教育機関における工芸の創作・教育の現状と、そのあり方」の活動をあわせた 6 年間の活動成果の一端をまとめたものとして、『21 世紀は工芸がおもしろい』を 2003 年 12 月に刊行。

『21 世紀は工芸がおもしろい』の出版に関しては、出版後さまざまな書評にとりあげられるなど、おおきな社会的反響をみる事ができた、たとえば、「月刊美術」12 月号 ART BOOKS 気になる本 美術書 [ 短評 ] 今月の “イチ推し” 本、季刊「銀花」第 136 号 冬の号 書物雑記、やきもの BOOK ガイド 季刊「陶磁郎」、新刊書籍案内「炎芸術」77、書評「民族芸術」第 20 号などである。対社会的な「実績報告」として、2 編の具体例を次に紹介したい。

中村桂子 (生命誌館館長) 毎日新聞 本と出会う 批評と紹介 2003 年 11 月 16 日

20 世紀は、生活用品が産業製品となり便利になったが、千年後に、どんな物を使っていた時代かと問われた時に誇れるものが残るだろうか。工芸に関わる人々が、その危機感と同時に、今見直されている身体感覚を呼び戻すとすれば工芸ではないかという意識を語り合った座談集。織物・陶磁器・染色・金工などさまざまな分野、東京・京都・大阪・沖縄とさまざまな土地で制作をする現場の話が面白い。たとえば、沖縄の陶器は媚びがなくすばらしいという外からの評と、素朴と稚拙を混同されているようで気になるという土地の人の疑問のぶつかり合いなどだ。芸術大学で工芸を学ぶ時代の中で、一子相伝から抜け出した、しかし質の高い工芸を産み出そうと決意した 21 世紀が楽しみだ。

金子賢治 (東京国立近代美術館工芸課長)「多様な捉え方が展望を開く」京都新聞 読書 2003 年 12 月 7 日

工芸とは何か。例えば鍛金という分野がある。金属板をたたくと延びていく。それは素材の性質でもあり、たたく者の意志でもある。その両者が様々なレベルで融合して一つの形に結実する。それが工芸である。ただしそのレベルのあり方によって 職人、産業デザイナー、個人作家 (工芸家) の別が生じ、どれを「工芸」として認識しているかによってさまざまな捉 (とら) え方が生じる。本書はこうした錯綜 (さくそう) する現代工芸の実相を捉え、未来への展望を見出そうとして行われた平成 9~14 年度の大阪芸術大学藝術研究所研究計画活動の中の、八つのシンポジウム・対談の記録である。工芸家、美術史家などが登場し、主要作品の図版もある。また巻末の用語集はどこにも出ていない最先端のものも収録されており、主催者、編集者の見識の高さをうかがわせる。

それにしても多様な捉え方があるものだ。美術家が「工芸的」という評語を忌み嫌うのはもともと工芸から美術が分離してくるので、その出自を無意識に隠蔽 (いんぺい) しようとするからだという人。工芸は西洋的な「視覚の美」ではなく、触ってもいいし、頭にきたら、夫婦

げんかなどで壊してもいい「全感覚の美」であるという人。工芸は感性と技術とがせめぎ合って表された形という人もいる。

とくに に関して機能や生活を持ち出して美術と異なる評価基準を設けようとする。それが宋の青磁や桃山の茶陶などという内外の古典の「写し」を基準にする工芸観と相互に補完し合い、極端な場合、宋の青磁の模作を現代陶芸の名品として絶賛するというような芸術論の倒錯をきたす。これが現代である。それに比べると本書の議論は随分と進化したものである。

しかし問題も大きい。 、 、 の区別がついていなかったり混同されたりしているからである。パネラーのさまざまな工芸観が現代工芸研究の水準に照らしてどの位置にあるのか、その俯瞰（ふかん）図を作り出すこと。そうしてこそ編集者の言う未来への展望が開かれていく。

## 付記

大阪芸術大学制作研究科設立の趣旨に「理論と実作の連動」が謳われている。芸術大学として、研究機関として、またわれわれ教員にとっても、おおいに賛同できる趣旨である。しかし実際の運用については困難もある。とくに「創作」という独自性にとりくむ実作者の研究活動は、個人的な実践による孤独な仕事を中心となるため、大学の機構のなかで「共同」で研究活動をする目的に限られる。実作者が理論家のような論理的な研究成果を求めても限界があり、特殊な研究目的を設定すれば、付带的、余技的な研究計画となりかねない。その点「セッション」設定を中心とした当研究計画の方法は、「理論と実作の連動」の趣旨からも有効に機能して、きわめて意義深い成果をあげ、参加者一同も年々熱がこもり、盛り上がったものとなった。

工芸学科を中心とした、実作を旨とする当研究計画は、講演会やセッション主催、取材、研修、交流などの実践を目的とするため、成果が目に見える形として残りにくい。一方では社会的な形で成果を示すべく、セッション記録の起稿を心掛けてきた。貴重な意見交換の成果を密室にとじこめるべきではないと考えたからである。原稿は、単なる記録ではなく、一般対象の読み物として自立できるものにするため、パネリストには、問題提起の発言をわかりやすく要約していただくこと、起稿原稿は、当日の発言の有無にかかわらず存分に加筆校正していただくこと、最低「再校」までお願いすることなどを、予め承知いただき、記録原稿作成作業にとりくんだ。原稿用紙相手ではなく、パネリストが互いに顔をあわせて発言する会話は、分かりやすく、興味深く、おおきな収穫となった。その成果として年度末に刊行した報告書『21世紀の工芸を考える—大阪芸術大学芸術研究所研究計画の成果から』に起稿原稿3編を掲載することができた。また、報告書には当研究計画の活動概要も掲載した。

当研究計画は、まとまった理論の構築よりも、創作のうえでのあらたな問題点を掘り起こすことを目的としてきた。その点においては大きな成果をあげることができた。だがそのために、あらたな研究課題がふえる一方という皮肉な状況におかれることにもなった。今後ますますこの研究計画が発展することをのぞむ所以である。